

Title	小田嶽夫『断橋の佳人』における晩年の憧憬
Author(s)	何, 問民
Citation	日本語・日本文化研究. 2020, 30, p. 133-143
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/77711
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

小田嶽夫『断橋の佳人』における晩年の憧憬

何 問民

はじめに

小田嶽夫（1900—1979）は明治生まれ、大正育ち、昭和に活躍し、移り変わる時代とともに輝いていた作家である。杭州での経歴を題材にした作品「城外」は昭和 11 年の第三回芥川賞を受賞し、脚光を浴びた。小田嶽夫といえば、よく魯迅、郁達夫などの中国文人に関する研究の補助線として注目されることが多い。田中栄一は小田の作家人生を杭州時代の「中国体験」、芥川賞受賞前の「作家生活体験」と「終戦を挟んでの戦中・戦後体験」の三つに分けている。そして、三つ目の段階の中では、昭和 50 年の作品から小田が「ひたすら静穏の世界へ入っていく」と判断し、それは小田の「最も憧憬し続けた境界であったかもしれない」と指摘した⁽¹⁾。しかし、指摘にとどまっており、田中は小田が憧れた「静穏の世界」の具体的な内容の分析について触れていない。筆者は昭和 50 年、小田がそれ以前とは違う世界を憧憬していたことについては同感である。

その世界を検討するために、まず昭和 50 年から小田が亡くなる昭和 54 年までに出版された本を見てみよう。出版された単行本は、平林たい子賞受賞作『郁達夫伝』（昭和 50 年）、『石川啄木』（昭和 52 年）、『断橋の佳人』（昭和 53 年）、『回想の文士たち』（昭和 53 年）の四つである⁽²⁾。交際のある文人の友人の青春と人生を論じるものがメインである。その中で特別なのは『断橋の佳人』という古い中国の怪異談を翻案した作品集である。この著作は小田の研究であり重視されていない。先行研究としては、項婉倩の修士論文「小田嶽夫の作品における杭州像」⁽³⁾があるが、そこでは杭州は小田の「郷愁の担い手」であると指摘され、それが「理想郷」になっていることを説明するために『断橋の佳人』の二篇が少しだけ分析されているに過ぎない。それ以外の研究では、小田の晩年の作品として作品名を挙げることに留まっており、分析はほとんどなされていない。このように『断橋の佳人』は従来あまり注目されてこなかったが、昭和 50 年からの作品群の中、現実と離れたフィクション作品は異例で、小田の精神世界を明らかにできる重要作品であると考えられる。本稿ではこの翻案民話集『断橋の佳人』に焦点を当て、昭和 50 年以降小田嶽夫が憧れた世界を明らかにする。

1. 『断橋の佳人』について

『断橋の佳人：中国男女怪談』（中央公論社、昭和 53 年）には 15 篇の中国の民話作品が収録されている。その最後に置かれている作品が表題作の「断橋の佳人」であり、「断橋」とは杭州の西湖の最も有名な見所で、「断橋の佳人」は「杭州西湖の美人」を指している。

小田嶽夫と杭州は深い因縁がある。大正 13 年に小田は外務省書記生として杭州にある日

本領事館へ赴任した。昭和3年に日本に戻り、そして2年後、文学に集中するため外務省の仕事を辞めた。杭州での経歴を題材にした作品「城外」は昭和11年の第三回芥川賞を受賞した。その後、数多くの杭州に触れた文章を発表した。昭和31年、小田は中国文化訪問団の一員として、人生最後の中国訪問として中国各地を巡り、杭州を28年ぶりに訪れ、亡くなる前までの数十年間は杭州と西湖を何度も作品に登場させている。杭州での生活は、実は小田にとって非常に価値がある思い出であり、その体験は小田の重要な創作の源であると言える。『断桥の佳人』は小田の人生の最後の杭州ものである。

昭和50年の6月下旬から昭和51年11月上旬まで、小田は呼吸器病で入院した。その間、上田秋成の『雨月物語』と西湖にまつわる伝説を記した『西湖佳話』を含め、数多くの中国の古典に基づく伝承を読んでいた。それをきっかけに、退院後『断桥の佳人』を創作した。15篇の作品のうち、7篇が『聊齋志異』(清、蒲松齡)、2篇が唐代伝奇小説、2篇が『剪灯新話』(明、瞿佑)、2篇が『西湖佳話』(清、古呉墨浪子)、1篇が『剪灯余話』(明、李昌祺)、1篇が唐の裴劭が書いた「孫恪伝」(『太平広記』)から翻案したものである。内容はお化けや幽霊の美人との恋愛話が多い。各話とその原作との対照は「表1」のとおりである。

表1 『断桥の佳人』と原作対照

	『断桥の佳人』	原作
1	女蛇の人恋い	古呉墨浪子『西湖佳話』15巻「雷峰怪迹」
2	長安の葬儀人夫の歌	白行簡「李娃伝」(唐代伝奇小説)
3	任氏の話	沈既濟「任氏伝」(唐代伝奇小説)
4	幽霊妾	蒲松齡『聊齋志異』16巻「呂無病」
5	幽玄な琴	蒲松齡『聊齋志異』15巻「宦娘」
6	杭州で会う	瞿佑『剪灯新話』3巻「愛卿伝」
7	不可解な女	蒲松齡『聊齋志異』16巻「霍女」
8	景園で逢った女	瞿佑『剪灯新話』2巻「滕穆醉遊鄴景園記」
9	曹国夫人の娘	蒲松齡『聊齋志異』21巻「葛巾」
10	賈雲華の生れ変わり	李昌祺『剪灯余話』5巻「賈雲華還魂記」
11	范十娘と封三娘	蒲松齡『聊齋志異』9巻「封三娘」
12	女狐の誠	蒲松齡『聊齋志異』17巻「小梅」
13	袁家の娘	『太平広記』445巻「畜獸十二」「孫恪伝」
14	不思議な俠女	蒲松齡『聊齋志異』4巻「俠女」
15	断桥の佳人	古呉墨浪子『西湖佳話』11巻「断桥情迹」

2. 現実逃避の道——中国怪異談を翻案する

『断橋の佳人』と同時期に出版した文集『回想の文士たち』の「あとがき」に、小田はその時期の心情を述べている。

思いがけなく私は同年配のおよび年下の多くの友人より生き永らえて、(略)非常に彼等に対するなつかしさに駆られたが、ふと気づいたのは、自分が死んだあと、自分について書いてくれる人がいないということであった。(略)残念なことに彼等(年若の友人)は私の青春を知っていない。例外もなくはないが、人間の一番大切なのはその青春時のような気がする。⁽⁴⁾

小田は数人の友人と死別し、悲しみを味わい、自分は友人を回想して作品を書く運命になったことを認識した。その上で、自分が死んだ後、人生、特に青春時代を語ってくれる人がいるかどうか心配している。また、小田の甥小田正郎は「小田嶽夫と高田」で小田の晩年は「友人・知人との旧交を温めたい気持ちが強かった」と記している⁽⁵⁾。つまり、友人は晩年の小田にとって重要な存在である。友人の死を次々と経験した小田の苦しさは想像できるだろう。さらに、昭和50年6月に小田が呼吸病で入院してから2ヶ月後、妻の雪も亡くなった。こうしたことから、小田が実感した時間の残酷さと、彼にとっての青春の貴重さを推測できる。さらに、小田の息子小田三月は「小田嶽夫と坪田譲治」の中で、小田の生活の実際を書いている⁽⁶⁾。「城外」を書くことで一時は「報われ」たものの、小田は戦後ふたたび「スランプ」に陥り、生活も「困窮」したという。

物寂しい入院生活で小田を慰めたのは中国の古典に基づく伝承であった。それに基づき、小田の「好み」に応じた『断橋の佳人』が創作された。サイドが『晩年のスタイル』⁽⁷⁾で指摘したように、「楽しみにふけること」は抵抗の一形式である。「娯楽が、快楽や私的次元と同じく、現状とか支配体制との和解を要求しない」。つまり、現実を無視し、理想の世界を作り、フィクションの物語を作り、自分を楽ませることで、一時的に精神的な快感を獲得する。『断橋の佳人』は昭和50年からの回想的作品群の中、唯一の娯楽性のある作品であるが、これは老境の苦しい現実に抵抗するために書かれたものではないだろうか。

小田が初めて中国の古典に基づく伝承と出会ったのは『断橋の佳人』の素材としてではない。杭州時代(大正13年～昭和3年)を記した「青春流離」によると、当時小田は、「領事館の仕事」も身について来ず、「領事に親しみ」も湧いて来ず、女中との秘密の不倫関係も「心に疚しく」、雑誌や文学を読む気持ちも起らなかった。しかし「本を読まないのも寂しい」ので、「ときどき杭州や西湖についての物語類」を読んでいた⁽⁸⁾。つまり、小田は西湖、あるいは、杭州と関係する物語について、昔から知っていた。さらに、「青春流離」ではこれらの物語を詳しく記述しており、物語を通して、小田は杭州の「美しい山水」、「古都の風

韻」を感じ、杭州人の「風流」、「遊惰」の気分を味わったことがわかる。それらは異郷にいて新しい環境になじめない寂しい小田を慰める存在であり、苦しい現実から逃避する道になっていた。そして、中国の古典に基づく伝承を深く知ようになったのは怪異談『聊齋志異』によってであった。

小田は昭和34年に『聊齋志異』の七つの作品を翻訳し、『少年少女世界文学全集』の『聊齋志異』(講談社)として出版した。その後、昭和36年には『聊齋志異』を主にした翻訳作品集『中国でかめろん』(新流社)も出版した。『中国でかめろん』の解説で小田は、魯迅、村松梢風が『聊齋志異』に対して高い評価をしていることを記している。それも小田の『聊齋志異』の翻訳を後押しした一つの要素かもしれない。

また、翻訳と共に、小田は中国の古典に基づく伝承に共感を持つようになったのだろう。小田は作者の蒲松齡がお化け類に興味を持った理由を「想像」した⁽⁹⁾。「栄達な生活を送れず、いつもこの世を寂しく感じていた」ので、蒲松齡は狐、虫、花などのものを人間の姿にし、「対等の関係で人間」と交わせると論じた。現実には叶わない願望は、非現実の世界で満たされる。蒲松齡は現実を乗り越える可能性、あるいは道を小田に示したのであった。

『断橋の佳人』の時期の小田は『聊齋志異』の作者蒲松齡と似たような境遇であった。先述のように周りの人が次々死亡し、自分も入院し、寂しい生活に苦しんでいた。『断橋の佳人』の半分は『聊齋志異』からの話を翻案したものである。古典に基づく伝承を読みながら、また翻案しながら、小田は『聊齋志異』を想起し、蒲松齡と同じように、怪異談を翻案することで自分が憧れる幻想世界を作り、現実から逃れようとしたのではないだろうか。そのことの論拠として、以下、「杭州という場所」、「円満な結末」、「成就する異種恋愛」という三つの観点を提示したい。

3. 逃避の場所——杭州

『断橋の佳人』の物語の中には杭州が出てくるものが多い。「女蛇の人恋い」、「杭州で会う」、「景園で逢った女」、「曹国夫人の娘」、「賈雲華の生れ変わり」、「断橋の佳人」のメインの舞台は杭州である。その中で、原作を改変し、小田が意図的に杭州としたものもある。「杭州で会う」は『剪灯新話』の「愛卿伝」からの翻案で、美しい遊女羅愛愛(愛卿)と青年趙広が恋に落ちた後、愛卿が戦争中亡くなり、転生してまた趙広と会う話である。原作で愛卿が赤ちゃんに生まれ変わる場所は無錫であったが、小田はそれを杭州に改作し、また杭州の美しい景色の描写も増やした。

表題作であり、最後的一篇でもある「断橋の佳人」にも改変が見られる。これは『西湖佳話』の「断橋情迹」の翻案で、文世高が劉秀英に一目惚れをし、困難を克服して一緒に幸福に生活する話である。小田はまず冒頭部分に杭州と断橋の描写を二段落分増やした。さらに、原作は戦乱のために夫婦二人は杭州に隠遁したという結末であるが、「断橋の佳人」は夫婦二人が「閑暇が出来た機会」に、「杭州へ出かける」という結末に変えた。最後に夫婦

二人が気軽に西湖で舟に乗るシーンも書いた。「断橋の佳人」のこの最後の場面は、小田の改作によりつけ加えられたものである。かつては「死人」となり、生き返った主人公は西湖で船に乗る。西湖の「嫋々とした情趣」に「うっとり」させられる。以前「毎日西湖を見ていた」が、西湖が「こんなにいい」とは知らなかったと感嘆し、水音を聴きながら「夢見るような」気持ちでいた。言い換えると、生死を経験した主人公は、西湖を再発見し、ある種の非現実感を感じるのである。

『断橋の佳人』の「あとがき」の最後で、小田は西湖が「全中国人の憧れ」、「恰好な」物語の舞台であり、日本の物語に西湖に「比敵する山川や湖沼が思い浮かばなかった」と述べている。小田は中国の古典怪異談の舞台としての杭州を絶賛した。

奥野健男が杭州領事館での経歴を小田の「文学の出発」、「原体験」⁽¹⁰⁾ であると指摘した通り、杭州体験は小田の文学と人生の基礎を構築したとも言える存在である。その上、杭州は小田にとって国籍や地理という公的なものを超え、感性的な、私的な存在になっている。回想録『文学青春群像』では、杭州領事館から日本に帰国した小田は日本の空を見ながら、「思いは遠い中国大陸へ走る」のであり、「郷愁」を感じ、「夢見ているところから来る楽しさ」があったと記している⁽¹¹⁾。

また、事変下の上海での日本人居留民を描いた小説「泥河」（昭和 15 年）にも杭州が出てくる⁽¹²⁾。主人公は上海から杭州に行くことによって、不穏な時局から、金持ちの娘と結婚した元恋人と、一時的に現実から逃避することができた。混乱した上海と対照的に、杭州は「静か」で、「古雅な品よさ」を具した町であり、まるで「夢の国」のようである。杭州は一つの完璧な逃避の場所になっていると見られる。さらに、昭和 31 年の再訪問の後に書いた小説「望郷」にも、杭州は「夢の様な浪漫的な情緒があった」⁽¹³⁾ とある。小説の結末で、小田は主人公の黄景林が夢の中で西湖を見たという設定をしている。

「泥河」と「望郷」の例は、明確に小田の杭州イメージを提示している。青春時代を象徴する杭州は、時間と歴史の流れの中で、小田にとって戻れない故郷となっており、小田の記憶の中で「夢」のようなところと理想化されている。戦争、疎開、貧乏、親友の死を経験した昭和 50 年以降の小田にとって、杭州は心の安らぎを求める精神的な避難地であったのである⁽¹⁴⁾。さらに、「著者自評」で、昔の杭州領事館の向かい側にあったかなり広荘な邸宅を「断橋の佳人」のいた家のあった場所⁽¹⁵⁾ のようにも想像したと書いてある。『断橋の佳人』の物語を書く際、小田は杭州時代のことを回想しながら作品に杭州を多く登場させた。その作品中の杭州も、小田にとっては夢のような幻想世界であり、つらい現実から逃避するための安らぎの憧憬の場所であったと考えられるのである。

4. 円満な結末

昭和 50 年以前の小田の小説には悲劇的結末が多い。例えば、「城外」のような別離の結末、「日本学士蔡万秋」、「夕景色」のような信念を貫かない結末、「さすらい」のような自殺

する結末などがある。しかし、『断橋の佳人』はそれらとは違う。

全15篇のうち11篇は元々円満な結末がある話を選んでいる。また、残りの「女蛇の人恋い」、「曹国夫人の娘」、「范十娘と封三娘」、「袁家の娘」は、悲劇的な結末から円満な結末に作り変えている。それについては表1にまとめる。

表2 結末を変えた作品

	『断橋の佳人』	原作	原作の結末	小田作品の結末
1	女蛇の人恋い	「雷峰怪迹」『西湖佳話』所収	許宣と白女は会えなくなった。	許宣は白女の影が西湖の上に現れるのを見た。
2	曹国夫人の娘	「葛巾」『聊齋志異』所収	常大用は葛巾に正体を問いたす。葛巾は怒って家出する。	常大用は葛巾の正体への疑問を押しとどめ、円満な生活を送る。
3	范十娘と封三娘	「封三娘」『聊齋志異』所収	封三娘は正体(狐)を告白して去る。	封三娘は正体を告白した後、一緒に生活を続ける。
4	袁家の娘	「孫恪伝」『伝奇』所収	妻が正体(猿)を告白して去る。	妻が告白した後、孫恪の願いで生活は昔通りにする。

これらは恋人が異種であるという客観的困難に対して、主人公の主観的な行動により結末が変わるといった型の物語になっているが、小田は主人公に「離れない」という選択をさせ、真の愛を成し遂げ、円満な結末を迎えるようにした。また、結末を改変していない11篇は、そのような話を選んだのである。

このように『断橋の佳人』において小田が悲劇的結末を避け、円満な結末にこだわったのは、つらい現実から逃避し、親しい人々と離れずにいる世界を憧憬したためではないだろうか。そのことは、次章の「異種恋愛」という要素をあわせて考えるならば、よりいっそう明らかになる。

5. 成就する異種恋愛

『断橋の佳人』のすべての話は、人と幽霊や人と妖怪の恋愛を描く作品である。小田は意図的に異種恋愛を描いたものを選び、あるいは「俠女」のように普通の話に怪談に仕組んだのであった⁽¹⁶⁾。なぜ小田はこのような異種恋愛の成就の話にこだわったのだろうか。現実に幽霊や妖怪などは存在しない。ほかに異種と言えるのは国籍や人種、または階級のこと

である。そういう意味で「異種」を考えれば、小田と二人の中国人女性との恋も異種恋愛である。

晩年の回想録「人生を作る」(昭和48年)で小田は、母親、叔母、妻を含め、六人の重要な女性に言及している⁽¹⁷⁾。その中の二人は杭州で出会った中国人女性である。一人は「城外」のヒロインのモデルとなったアマ(女中)の桂英(本名は秀宝)で、もう一人は葛幽琴という中国人の令嬢である。この二人は小田にとって重要な存在であった。

「城外」は小説であるが、小田の実体験に基づく私小説であるため、その主人公「私」は小田自身、ヒロインの桂英は実在の秀宝とおおむね重なると考えてもよいであろう。アマの桂英は蘇州出身で、すでに結婚し一人の娘がいる。頭が良く、仕事もできて清廉な気持ちの持ち主であり、杭州領事館の人に好かれていた優しい人である。杭州領事館に赴任し異郷で孤独に陥った「私」は孤独を逃れるために、まだそれほど親しくなっていない桂英と肉体関係を持つ。桂英は「私」を慰め、「私」の精神のよりどころともいえる存在になっていく。二人の関係は最後に「私」が日本に戻り、桂英も自分の夫の元に戻って終わる。桂英との別離に「私」は「深い悲しみ」⁽¹⁸⁾を感じる。この階級と国籍を超えた恋は成就しなかった。小田の回想記「人生を作る」にも、自分の「孤独、寂寥の朝夕」に、もしアマの秀宝がいなかったら乗り越えられなかったであろうと記している。小田は二人の関係は「城外」に書いたため「人生を作る」では略したとしているが、彼女に対しては「どんなに感謝してもし切れない」⁽¹⁹⁾気持ちを表している。

もう一人の葛幽琴とは、小田が通訳と一緒によく遊びに行った中国人の家の長女である。幽琴は非常に静かな、あるいは寡黙な人であった。小田は通訳を通して、幽琴の父親に彼女との結婚を申し出た。しかし、幽琴に「いつまでもほかに行かず杭州にいる」という願望がある葛家は小田に、「あなたが永久に中国で暮らすならよしい」という条件を言った。当時、大排日運動が起こり、日本人として「人目を引くことを恐れて」⁽²⁰⁾いた小田は、故国と幽琴の二者択一に際して、故国を選んだ。結局、幽琴との恋も失敗に終わった。

『断橋の佳人』にはこの二人をモデルにしたと思われる人物が登場する。「断橋の佳人」の主人公の文世高は蘇州の出身であり、秀英は杭州の出身である。アマの秀宝(桂英)は蘇州の出身で、杭州で働いていた。また、秀宝(桂英)は名前も秀英と似ている。本名の「秀宝」と小田が「城外」で作った偽名「桂英」を組み合わせたようである。秀英の住む劉家は断橋の近くにある。杭州領事館も西湖のほとり、断橋の近くであった。さらに、小田は「城外」と「断橋の佳人」の両方に、生死の境をさまようという要素を盛り込んでいる。「城外」の桂英が病気になり危篤に陥った時、「私」は桂英を重視しはじめる。桂英が治った後、「私」の「心はかつて味はったことのない春のような和やかな気分」⁽²¹⁾に解放される。「断橋の佳人」では、主人公の文世高が死んだために自分も自殺した秀英は、文世高といっしょに山でお棺の中から奇跡的に生き返る。生き返った二人が杭州に行ったのも「季節はちょうど春」である。西湖の山が「新緑を滴らし、楊柳の葉が「春の微風」に「女の髪」のようになり、

柳絮が時々舟の中に落ちてくる。その風景は「城外」の「春のような和やかな気分」の具体化とも言えるであろう。秀英と文世高の危機を脱した後の気持ちは「城外」の「私」と共通しているように見える。このように「断橋の佳人」の秀英は小田の恋人であった秀宝(桂英)と重なる人物である。

次に葛幽琴と『断橋の佳人』との関係について述べる。まず、「幽玄な琴」という話は、タイトルが幽琴の名前を想起させる上に、主人公は「葛家」の娘になっている。それを組み合わせると葛幽琴になる。「人生を作る」で小田は、幽琴の名前に「どこか幽玄な感じ」があり、そこがたまらなく「気に入った」と書いている⁽²²⁾。

『断橋の佳人』に関する「著者自評」の最後の一段落で、「杭州で会う」について次のように話している。

私が杭州在住当時、その令嬢に魅せられてしばしば出入りしたある中国人の知人の家があり、その家のことを頭に置いて、そのくだりを記したのであった。⁽²³⁾

「令嬢」とは幽琴のことであると思われる。では、「杭州で会う」の中、主人公の趙広がヒロイン愛卿に似ている令嬢の後をつける場面の描写を見てみよう。

二人は湖の東側の、湖に近い繁華街を通り抜けて、東へ少し行ってから、左へ曲り、直きに右へ曲がって、両側に白壁の、同じような感じの邸宅のつづく細い道へ入った。そこを少し行って、右側の、とある一軒の家へ二人は姿をかくした。

小田は「杭州彷徨」で、幽琴の家は「路地のような細い通りに、白い壁の高い同じような家が両側から触れ合いそうに迫って立った家並のうちに」あったと記している⁽²⁴⁾。「杭州で会う」の描写は幽琴の家の記述と一致している。つまり、ここの「家」は恐らく葛家であり、この「令嬢」は幽琴である。

「杭州で会う」と幽琴との関係をさらに分析するために、小田の杭州再訪について述べる。昭和31年、中国文化訪問団の一員として中国各地を巡り、28年ぶりに杭州に行った小田は、翌年3月に「杭州彷徨」を書いた。昔の日本領事館に行って、胸が「高鳴った」小田は、忘れられない「青春の盛り」を回想する時、「葛家の令嬢幽琴にあこがれの胸をふるわせた」⁽²⁵⁾と、その中で幽琴に対する強い感情を表明している。杭州を訪れ、友達と一緒に見物する時に、小田は十二、三歳の「色の白い、眼のさわやかに切れ上がった美少年」と出会って、「私の昔の恋人に似ている」と思った。葛幽琴も「丈が高かった。面長の、眼の切れ上がった、少しいんきに沈んだ」顔立ちである。その少年と目が似ていると考えられる。そうして、小田は「自身年は取っても心の底はさして青年時代と変わらない気持ち」を持っていた⁽²⁶⁾。

幽琴の両親の「いつまでもほかに行かず杭州にいる」という要求に応じて、28年経っても幽琴はまだ杭州にいるはずだと思い、小田は昔の幽琴の家を探しにいった。しかし「記憶もおぼろで、ようよう道筋に自信を失って」、結局同行の友達がいて諦めたのである。もし「一人でいたのなら、私はさまよいさまよった末に、遂には見つけ得たであろう。」⁽²⁷⁾と小田は未練を残した。28年経っても、小田は幽琴のことが忘れられなかった。

前章で指摘したように、『断橋の佳人』ではすべての作品が円満な結末をむかえる。異種恋愛ということに着目すると、男性主人公は「正体がわかったあとも、美女から離れずに関係をつづける」⁽²⁸⁾という筋になっている。こうした筋立ては、小田が青春時代の失敗した恋、特に葛幽琴との恋に遺憾を感じ、それを異種恋愛の幻想の世界で埋め合わせるためのものではないだろうか。このことをもっともわかりやすく示す例が「杭州で会う」である。

「杭州で会う」の原作である「愛卿伝」(『剪灯新話』)は、羅愛愛(愛卿)という詩がうまく賢くて美しい遊女と、趙広という金持ちの青年の恋話である。愛卿と趙広は結婚した後、夫が長期赴任していたとき、蛮族が攻め込んでくる。趙家が占領され、兵士が愛卿の貞操も奪おうとする時、愛卿は首をしめて自決する。この悲劇のあとに戻ってきた夫は、いつも通り愛卿を迎えられる。これは、死んだ愛卿が幽霊になっているからである。彼女の正体を知った趙広は知らないふりをして、一緒に楽しく過ごそうと思う。しかし、ある日愛卿は真実を語り、自分は一晚を共にした後に無錫のある家に転生すると言う。もし趙広が自分のことを忘れないなら、輪廻した家に来てもらいたい、自分が一笑で証明する、と伝える。最後に、趙広は愛卿が転生した家を探し、赤ちゃんが生まれた宋家に話を明かし、親戚のように仲良くする。

小田が改作した「杭州で会う」は「愛卿伝」のいくつかの箇所を大幅に変えている。愛卿は無錫ではなく、小田が葛幽琴と出会った杭州で赤ちゃんに生まれ変わる。趙広についても、すぐ探しに行く原作と異なり、28年後に杭州を訪れた小田と同じように、「杭州で会う」の趙広は18年後に探しに行く。さらに、原作で簡単に描かれている転生した愛卿を探すシーンは、かなり長く詳しく書いている。趙広は西湖の辺りで、愛卿に似ていて、母親と一緒に歩いている十七、八歳の娘を見つける。上述のように、昭和31年に杭州を再訪問した小田も昔の恋人と似ている少年を見つけた。趙広は二人の後をつける。彼女たちの家の標札には「葛健」と記されていた。趙広は商人を通して愛卿の生年月日を確認する。小田も通訳を通して葛家と親しくなった。「杭州で会う」では愛卿の生まれ変わりの家がわかった後、趙広がその娘と直面する場面が拡大されている。直面する場面の時間(秋の夕)と女性の登場のしかた(立っている、静かに)もやはり「杭州彷徨」で記した幽琴と単独に会った場面と一致している⁽²⁹⁾。「杭州で会う」のヒロインの愛卿は小田のかつての恋人、幽琴と重なる人物になっている。

杭州領事館から帰国した後、小田は見合いの相手と「平凡な」結婚をした。一緒に人生の困難を乗り越えた妻に感謝の気持ちはあるが、「非常にわがままな性格」の妻は小田の好き

なタイプではなかった⁽³⁰⁾。その後、小田はある「聡明そう」で「清純」な女中⁽³¹⁾のことが好きになる。小田の様々な小説の中の女性主人公を見てみても、小田は幽琴のような優しく、聡明な女性が好きであったと推測できる。小田は昭和31年の杭州再訪以来、幽琴のことを忘れておらず、晩年まで幽琴との恋愛を引きずっていた。昭和50年8月に妻の雪が亡くなった後、幽琴を愛しく思うことに遠慮がなくなったのであろう。

幽琴に関して、小田は「杭州彷徨」で、三姉妹の中で「幽琴だけがひどく古風に、おくゆかしい感じ」だと評価している。さらに三姉妹それぞれは「過去・現在・未来」の中国を象徴し、幽琴は「過去の中国」⁽³²⁾であると書いている。小田の幽琴への憧れと過去の中国への憧れは重なっているのかもしれない。

その憧憬は『断橋の佳人』で実現した。前章の最後に述べたように、小田は悲劇的結末を避け、「杭州で会う」を含め、『断橋の佳人』のすべての話を円満な結末をむかえるものにした。そこでは異種恋愛は成就するのである。小田の「異種恋愛」、つまり二人の中国人女性との恋愛は成就しなかった。そして、幽琴のことは後年まで忘れることができなかった。晩年の小田は、憧れの女性幽琴との成就しなかった恋愛を作品の幻想世界の中で成就させ、つらい現実世界から逃避しようとしたのである。

終わりに

従来冷徹な目で社会や世界を見ていた⁽³³⁾小田嶽夫は、田中栄一が指摘した通り、昭和50年の作品から「ひたすら静穏の世界へ入って」いった。それは小田の「最も憧憬し続けた境界であったかもしれない」。本稿ではその小田が「最も憧憬し続けた境界」をより具体的に明らかにすることを目指した。昭和51年の『断橋の佳人』に注目すると、小田は作品の中に自分の憧れた幻想世界を見だし、ときには改変によってそれを作り出した。それは「杭州」、「円満な結末」、「成就する異種恋愛」という三つの面に見ることができた。残酷な老境に陥った小田は、そうした幻想世界に敵しい現実からの逃避場所を求めたと考えられるのである。

注：

- (1) 田中栄一「小田嶽夫論」『国文学 解釈と鑑賞』(64)、1999年、pp.15-21.
- (2) 小田三月『小田嶽夫著作目録』(青英舎、1985年)による。
- (3) 項婉倩「小田嶽夫の作品における杭州像」杭州師範大学、2018年。
- (4) 「あとがき」『回想の文士たち』冬樹社、1978年、p.204.
- (5) 小田正郎「小田嶽夫と高田」『国文学 解釈と鑑賞』(64)、1999年、p.26.
- (6) 小田三月「小田嶽夫と坪田譲治」『国文学 解釈と鑑賞』(64)、1999年、p.31.
- (7) エドワード・W. サイド(大橋洋一訳)『晩年のスタイル』岩波書店、2007年。

- (8) 「青春流離」『漂泊の中国作家』現代書房、1966年、p. 80、p. 86.
- (9) 「聊齋志異解説」『少年少女世界文学全集』（東洋編3）講談社、1959年、p. 423.
- (10) 奥野健男「解説」、小田嶽夫『望郷』学習研究社、1964年、p. 351.
- (11) 「青春の終わり」『文学青春群像』南北社、1964年、p. 30.
- (12) 「泥河」『泥河』砂子屋書房、1940年、p. 91.
- (13) 「望郷」『望郷』学習研究社、1964年、p. 27.
- (14) 「上海総領事館」（『回想の文士たち』冬樹社、1978年）でも小田は、山から見る杭州の景色について「何か心を安ませる風景」（p. 127）であると述べている。
- (15) 『断橋の佳人』著者自評『著者自評』玄海出版、1979年、p. 18.
- (16) 「あとがき」『断橋の佳人』中央公論社、1978年、p. 301.
- (17) 「人生を作る」『三笠山の月』小沢書房、2000年、pp. 9-31.
- (18) 「城外」『望郷』学習研究社、1964年、p. 107.
- (19) 「人生を作る」『三笠山の月』小沢書房、2000年、p. 27.
- (20) 「杭州彷徨」『漂泊の中国作家』現代書房、1966年、p. 164.
- (21) 「城外」『望郷』学習研究社、1964年、p. 102.
- (22) 「人生を作る」『三笠山の月』小沢書房、2000年、p. 30.
- (23) 『断橋の佳人』著者自評『著者自評』玄海出版、1979年、p. 17.
- (24) 「杭州彷徨」『漂泊の中国作家』現代書房、1966年、p. 172.
- (25) 同上、同頁。
- (26) 同上、p. 163.
- (27) 同上、p. 182.
- (28) 「あとがき」『断橋の佳人』中央公論社、1978年、p. 301.
- (29) 「杭州彷徨」『漂泊の中国作家』現代書房、1966年、p. 173.
- (30) 「人生を作る」『三笠山の月』小沢書房、2000年、p. 32.
- (31) 「葡萄園転々」『文学青春群像』南北社、1964年、p. 36.
- (32) 「杭州彷徨」『漂泊の中国作家』現代書房、1966年、p. 178.
- (33) 田中栄一「小田嶽夫論」『国文学 解釈と鑑賞』（64）、1999年、p. 20.